

氏 名	あり た めぐみ 有 田 恵
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 351 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 人 間 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	＜生涯発達心理学＞から捉える死 ——末期癌患者との対話から——

論文調査委員	(主 査) 教 授 鯨 岡 峻 教 授 杉 万 俊 夫 教 授 C. ベッカー
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、終末期医療の現場で自らの死を意識しながら生を営む人々との対話に基づき、そのありようを詳細に描き出すことを通して、これまで生涯発達研究において扱われることの少なかった終末期の死の問題を取り上げようとするものである。

全体は5つの章からなる。まず第1章では、先行研究を概観すると共に、その批判的検討を通じて、これまでの研究は「個人の死」に注目するあまり、生と死の繋がりを十分に視野に入れた研究が少なかったこと、また周囲他者との関係性において死を論じる研究が極めて少なかったことを指摘している。すなわち、従来の死を巡る議論では、死の一般的な意味を追求めることに傾き、死を迎える当事者の「具体性」や「固有性」を省みることが少なかった。だが、当事者の「固有性」に注目することは、決して当事者の「個人の死」に閉じるのではなく、むしろ当事者と周囲他者との関係性を浮き上がらせることに繋がるものである。このような認識の上に立って、申請者は、死の「固有性」に着目することこそ、死生の本来の意味を探る鍵であるとしている。この死の「固有性」の議論を展開する中で、「固有性」を掬いあげつつ死の意味を取り上げることが可能になる学問的視点として、生涯発達心理学や死生学、関係発達論などを参照し、申請者自身の死を捉える研究上の「立ち位置」を明らかにしようとしている。

続く第2章では、心理学における従来の面接法を批判的に検討する中で、申請者が用いた「関与・観察的対話法」という方法論について論じている。「関与・観察的対話法」とは、終末期を生きる人々が、緩和医療科という場でどのように日々を過ごしているのか、また、自らの死をどのように意識しながら今の生と向き合おうとしているのか、協力者のその思いを捉えようとする対話的方法である。対話という点においては、従来の非構造化面接のうちの1つであるといえるが、協力者と研究者の間で交わされた言葉のみではなく、その表情や「間主観的に捉えられたもの」を分析の軸に据えるという点で、この「関与・観察的対話法」は従来の面接インタビュー法とは異なる。また、従来の面接インタビュー法では、データの客観性を担保しようとして協力者の語った言葉のみを取り上げ、その逐語録を分析・解釈することが多かったが、申請者はこれに疑問を投げかけ、研究者と協力者が共に一つの場を生きることから研究が始まること、両者のあいだでさまざまな情動が行き交う中で、協力者の生きる世界が研究者に間主観的に把握されるようになってくること、そして、そのときはじめて協力者の語りからその生きる世界の意味を開示することができることを主張する。つまり、協力者の語る言葉のプロトコルだけでは語り手の真意が捉えきれないこと、また語られた言葉の真の意味は、研究者と協力者とのあいだの「間主観的な関係」のありようから生まれ出てくるものであることを、メルロ・ポンティの言語論、鯨岡の関与・観察の方法論を基にして論じ、従来の面接法とは異なる独自の方法論を提唱している。

第3章では、第1章、第2章の議論を踏まえ、申請者が緩和医療の現場で行った4名の協力者との対話の中からいくつかのエピソードを取り上げ、それに考察を加えている。

そこから明らかになるのは、死を迎える過程のみならず、これまでの生を引きずって今を生きる過程そのものである。人

がどのような死を迎えるかは、その人がこれまでどのような人生を送ってきたかと切り離すことができない。第1節では、「桔梗さん」という協力者との対話から、協力者にとって、現家族を超えた先祖や子孫と自分との繋がりが大きな意味を持つことを明らかにしている。第2節では、「すみれさん」という協力者との対話を取り上げている。その対話の中で出てきた、自分の死後、自分の存在がどのような形で残るのかという死後の自己存在についての問いは、死ぬことの意味だけではなく、これまでの生と今現にこうして生きていることの意味を同時に照らし出すものであり、また残される者にこれまでの関係を繋ごうとする意味を持つものでもあった。

続く第3節、第4節では緩和医療科という場が持つ意味を協力者との対話から考察している。まず、第3節では、「ゆうさん」という協力者との対話を取り上げ、死を間近に控えた現実を前に、今の生の営みはどのような影響を蒙るのか、その間際の生のありようを詳細に描き出している。その中で、緩和医療科という場が単なる医療の場ではなく、最期の時を過ごす生活の場でもあることを改めて明らかにしている。さらに第4節の「翔さん」との対話では、逝く者と残される者の思いが入り混じる一人の人間の死と生を考察している。第3節のゆうさん同様、翔さんは自らがこれまで大切にしてきた生き方や価値観を貫こうとする一方で、これまでの生にはなかった他者の助けも借りながら生きることもまた1つの生き方であることに気づくようになる。そして、逝く者が残される者の視点から逝くことについて考える様子を間際の緊張感と共に明らかにしている。

本章での4人の語りを通して、申請者は死を目前にした協力者が究極のところでは求めるものが「家族との繋がり」であり、身近な人と何かを「分かち持つ」ことであると結論付けている。

第4章では、4名の協力者との対話を「自己存在」というテーマの下に考察している。ここでは先行研究でこれまで明らかにされてきた死に逝く過程での自己存在の変容や、それに伴う痛みの問題を論じると共に、従来考察されてこなかった「死後の自己存在」という新たな点についても考察を巡らしている。さらに、この死後の自己存在について考えることを通して、家族をはじめとする周囲他者との関係性という視点の重要性が浮かび上がり、この観点を取り入れることによって、「個人の死」を中心に展開されてきた従来の死の臨床研究を見直すことができると主張している。

終章では、これまでの議論を総括し、死に逝く過程において人の生の営みがそれまでの「する」ことから「ある」ことへと、そしてそれまでの「獲得する」ことから身近な他者と「分かち持つ」ことへと変容していく過程であるとまとめた上で、死に逝く人々が直面する問いや痛みの問題、さらには人が生きそして逝くことの意味を一般的に考察するための学問的枠組みとして、新しい〈生涯発達心理学〉を展望している。そして死の臨床研究における「関与・観察的対話法」という新たな手法についても、臨床面接のありようや研究者と協力者との関係性のありようをさらに吟味する必要性を述べ、今後この方法をさらに練成する方向性を示唆している。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、緩和医療の現場に赴き、末期癌によって死が目前に迫った人が、これまでの生と間近に死に逝くことをどのように考えて今を生きようとしているかを、その人との対話を通して明らかにし、一人の人間が生き、そして逝くことの意味を捉えようと試みた意欲的な論考である。特に申請者自身が「死の床に臨む」という字義通りの「臨床」を潜り抜けて得た貴重な対話資料は、生涯発達研究や死生学研究など、関連分野に大きなインパクトを与え、今後の研究に新しい方向性を示したものとして高く評価することができる。

本論文は理論的・方法論的考察を展開した第1、2章と、協力者との対話を詳細に描き出して考察した第3、第4章、および最終考察を行った終章の全5章からなる。

第1章で申請者は、「ライフサイクルの中で死はどのような意味を持つのか」という問いを立て、死に関する先行研究を批判的に検討し、その中で、従来の研究は、死に逝く人が死をどのように受容するのか、それを妨げるものは何かといった問いに象徴されるように、死をあくまでも「個人の死」「個人の内面の死」として取り扱ってきたがために、死に逝く人がこれまでどのように生きてきたのかという、生との繋がりにおいて死を考える観点、また死を周囲他者との関係性の中で考える観点が十分でなかったことを、主に死生学や関係発達論の言説を参照しながら明らかにしている。関係論的観点から死を考える立場は従来の研究の枠組みではほとんどなく、ユニークな視点として高く評価することができる。

さらに申請者は、既存の研究では死が「個人の死」として扱われてきたにもかかわらず、その扱いが、死一般についての言説を導くことに急で、一人の人間の死に逝く生き様の具体的なありよう、つまり死の「固有性」を十分に汲み取るに到らなかったことを批判する。申請者によれば、死に逝く生き様としての「固有性」に迫りえなかったからこそ、死を個体論的に考える結果になったのであり、逆に、身近な他者（見送る者）と逝く者との間にある死の「固有性」を詳細に描き出すことができれば、死をこれまでとは違った観点から論じることが可能になると主張する。これはこれまでの先行研究に見られなかった新しい視点である。

申請者のこの視点は、自らの臨死体験に近い体験、申請者自身が見送る者として体験してきた身近な他者の死、さらには死の臨床研究の基礎となってきたキューブラー・ロスの原著の読み直し、および人の生涯過程は周囲他者の生涯過程と相互に影響を及ぼし合う中で進行するという「関係発達論」の立場から導き出されたものでもある。特に、「死の受容の5段階説」で名高いロスの著作に対して、その著作の重要性は、臨床の結果から導かれた5段階説よりも、むしろ実際に患者に接し、患者の生の声を聞き、その生き様に触れる彼女の臨床実践を詳細に描き出したところにあったとする申請者の「読み直し」は、死の臨床に関するこれからの研究への重要な貢献である。

第2章では死の「固有性」を扱う上での方法論として、「関与・観察的対話法」を提唱している。「関与・観察的対話法」とは、一種の面接インタビュー法であるが、従来のその方法は、協力者の語った言葉の逐語録を提示し、その分析と考察に終始するものが大半であった。これに対して申請者は、それでは協力者の語った言葉に込められた意味を十分に把握できないと述べ、協力者が研究者と共に過ごす中から紡ぎ出される言葉は、研究者との関係性において立ち表れるものであり、両者のあいだの「間主観的關係性」に言及する必要があると説く。そして、研究者がそこで間身体的ないしは間主観的に把握したものを提示することによってはじめて、読者は協力者の語りの意味に接近できると主張する。これが「関与・観察対話法」の内容であるが、これは従来のインタビュー法を超えると共に、臨床面接法一般に対して大きなインパクトを与え得る斬新な方法論の提示となっており、学界への大きな貢献であると評価できる。

こうした議論を踏まえ、第3章では緩和医療科で最期の時を過ごす4名の協力者との対話を詳細に描き出している。それは単なる逐語録ではなく、紡ぎ出された言葉を聴いた研究者＝申請者に間主観的に把握されたものを併せて提示するかたちになっており、その語りの状況を生き生きと再現することに成功している。そして4名の協力者との対話から、死に逝く人が間際の生の中でも「家族との繋がり」を顧慮し、家族と何かを「分かち持つ」ことに気持ちを向けていることを見出している。さらにその人たちが、残される者への形見を考え、また祖先と自分あるいは子孫と自分の関係を考えるというように、有形・無形なものの中に自分にとっての大切な他者との繋がりを求めることを明らかにしている。こうした対話分析の結果は、死の問題をまさに「固有性」において捉えた内容になっており、死の臨床研究のこれまでにない新しいかたちを示したものになっている。

さらに第4章では、4名の協力者との対話をまとめ、死の問題は生の問題と切り離して論じることができないこと、そしてその人の生は家族を始めとする他者との関係と切り離しては語り得ないことから、死の問題は決して本人にのみ回収され得るものではないことを改めて指摘し、死の臨床研究に「関係性」という新しい視点を取り入れる必要性を説くと共に、従来の生涯発達心理学を超えた新しい＜生涯発達心理学＞を展望し、その中に死の問題を位置づける構想を提示している。今後、この方向での研究の展開を大いに期待したい。

このように、人の生の終末期に狙いを定め、人の死を周囲他者との関係と切り離せないものとして論じる本研究は、社会環境の中で人間の生涯を考究する共生人間学専攻人間社会論講座の目的に叶った優れた論文である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。